

それぞれの施設では、年間、どれくらいの体外受精を行っているのでしょうか。また、年間の採卵手術の件数と採卵した卵子の数、胚移植件数などはどうでしょうか。そして、どのくらいの妊娠、出産件数があったのかなど、実際に行った体外受精の実施数や、タイミング療法や人工授精などの治療周期数に関すること、また出産件数までを含めて調査をしました。そして、体外受精の妊娠に対しては流産や早産が多いとの意見がありますが、実際はどのようなのでしょうか。

9-1 体外受精の実施数と妊娠・出産、そして患者さん年齢

●年間の治療周期数

年間の治療周期数については2016年4月～2017年3月まで、あるいは独自の最新年1年間を明確にし各施設から回答をいただきました。年間の治療周期数、採卵手術件数、採卵回数、胚移植数、妊娠数、出産数のすべてに回答のあった140施設について見ていきましょう。治療周期数は78,241件でした。通常媒精では28,994件、顕微授精では49,247件で顕微授精がかなり多いことがわかります。

●年間の採卵件数など

総採卵手術件数は82,389件で、平均560件、最多件数は5,845件で、最少件数は16件でした。総採卵回数は389,215件で平均3,216回、最多が約20,000回、最少が97回でした。胚移植件数は平均482件、最多が5,074件、最少が4件でした。最多と最少を比べるとだいぶ幅があることがあり、施設の規模、患者さん数などに大きな差があることがわかります。平均で出してしまうとわかりづらい部分もあるので、これを最頻値で出すと、採卵手術数は100件、採卵回数は580回、胚移植数は90件となります。

●妊娠数と出産数

妊娠数については20,906件で、患者さん平均年齢と同じように35～39歳の年齢層の患者さんが多く約半数を占め、8,858件ありました。これは出産数についても同様で13,567件のうち35～39歳が5,959件です。これらから、78,241件の治療周期数のうち妊娠は20,906件（27%）、出産は71,444件（9%）と捉えられますが、実際には出産は前年度の胚移植も関わってきますので相対的な結果として見てください。

●体外受精患者さんの平均年齢

回答136施設での患者さんの平均年齢は38～39歳がもっとも多く54%を占め、36～37歳が20%、40～41歳が11%といずれも高年齢であることがわかります。

●患者さんの最高年齢と出産最高年齢

患者さんの最高年齢の分布は40代後半が多く、中でも最高年齢は57歳。出産の最高年齢の分布では、40代半ばに多く、最高出産年齢は50歳でした。厳しい状態ではあっても希望はあるともいえます。また、自分たち夫婦が何歳まで治療を行うかの参考にもなるでしょう。

9-1 体外受精の実施数と妊娠・出産、そして患者年齢

●年間の治療周期数 (有効回答数 140 件)

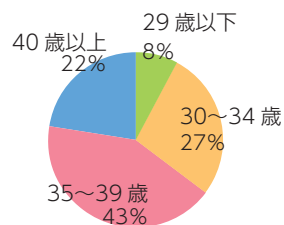
年間 78,241 件



●妊娠数

総数 20,906 件

29 歳以下…… 1,660 件
 30~34 歳…… 5,721 件
 35~39 歳…… 8,858 件
 40 歳以上…… 4,667 件



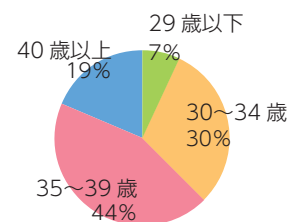
●年間の採卵件数など

年間の採卵 (手術) 件数…… 82,389 件・平均 560 件
 採卵した卵子の総数…… 389,215 個・平均 3,216 個
 胚移植件数…… 69,396 件・平均 482 件

●出産数

総数 13567 件

29 歳以下…… 977 件
 30~34 歳…… 4,108 件
 35~39 歳…… 5,959 件
 40 歳以上…… 2,523 件

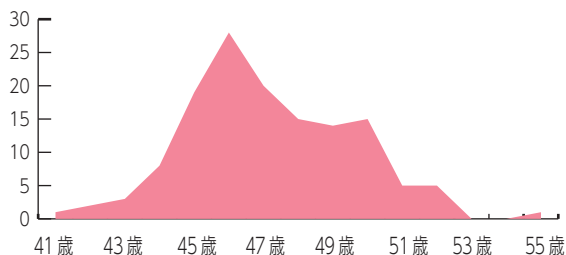


●体外受精患者の平均年齢

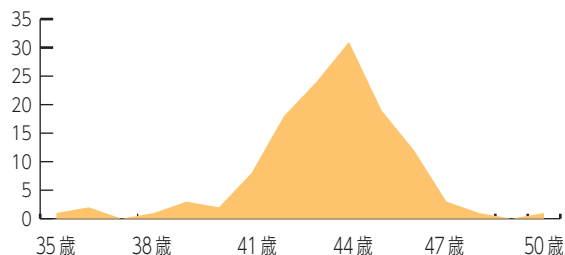


(有効回答数 136 件)

●実施患者の最高年齢 (有効回答数 136 件)



●実施患者の最高出産年齢 (有効回答数 126 件)



9-2 一般不妊治療の状況 ▶一般不妊治療の患者が多いから、体外受精で妊娠する割合が少ないとは限らない

一般不妊治療と体外受精の治療周期を、それぞれどれくらいの割合で行っているか。また、どちらの患者が多いか、そして妊娠する割合はどちらが高いかを、それぞれ100%になるように回答していただきました。これを見ると、一般不妊治療6～7割に対して体外受精4～3割の割合で治療している施設②が多いことがわかります。この②のパターンの施設では、患者の割合も一般不妊治療の方が多く見えてとれます。では、一般不妊治療で妊娠する割合も高いのかというと、決してそうではなく、4割以上が一般不妊治療で妊娠、つまり6割以上が体外受精で妊娠、7割以上、8割以上が体外受精で妊娠という施設が4分の1以上あることがわかります。これらから一般不妊治療を多く行っているところでの体外受精治療は期待ができないという方程式は成り立たないことがわかります。

ただ、体外受精の治療割合が多く、体外受精患者が多いところは総じて体外受精での妊娠割合も高くなりますから、より専門的な治療を受けることが期待できると考えてよいでしょう。病院選びをする際の参考の1つになるのではないかと思います。

9-3 流産と出産について ▶流産になる確率は一般妊娠と変わらない。でも早産は多い傾向。

体外受精による妊娠を、一般妊娠に比べると流産は多く、早産は変わらないとする意見が多く、またそれについてはわからないとする意見も多いことがわかります。流産に関しては一般妊娠よりも多いという回答が半数以上になりました。その原因については、治療年齢が高いためとあります。平成27(2015)年人口動態統計によると第1子出生時の母の平均年齢は30.7歳ですが、9-1からわかるように体外受精を受けているもっとも多い年齢層35～37歳未満よりも若くなります。体外受精を受けている時点で35歳として、36歳で妊娠し、その10ヵ月後に赤ちゃんが生まれてくるわけですから、母親は37歳くらいということになります。

胚の染色体異常率は、高年齢になれば確率もあがってくるので、これが流産へとつながっていきます。そのため体外受精だから多いとは言い切れないことが一般妊娠時と変わらないの32%に含まれているのでしょう。体外受精が原因かについては、大規模で専門的な調査が必要になります。早産については、一般妊娠時と変わらないが半数でした。やはりこれも年齢が高いことが理由にあげられています。

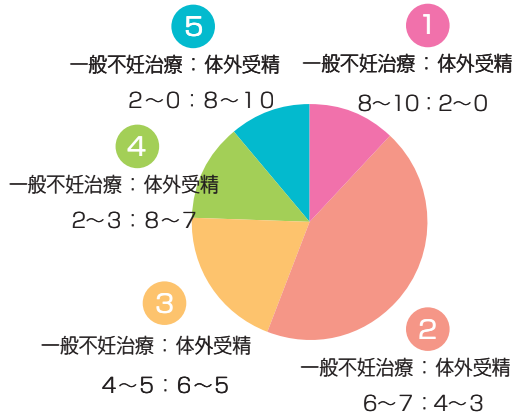
双胎妊娠については、有効回答数146施設に対して双胎があった施設は96施設あり、このうち1個胚移植で双胎になったと回答した施設は73件、複数胚移植では68件でした。実際の多胎妊娠の件数は1個胚移植が277件、複数胚移植が445件でした。実際の多胎件数は1個胚よりも複数胚の方が上回るのは納得がいきますが、1個胚移植で双胎になったケースを持つ施設が複数胚よりも若干多いとは予測していませんでした。

1個胚移植で多胎妊娠になったというケースを持つ施設が複数胚移植よりも多いのは、考えている以上に1個胚から一卵性双胎になるケースが多くあるということにつながります。

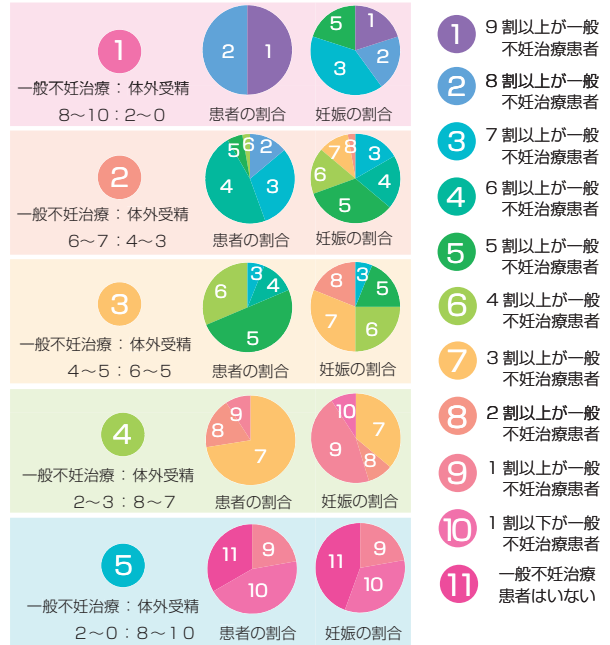
6-4の調査で1個胚移植を行っている施設は80%以上、9-1の調査から妊娠数は20,906件と出ています。単純に計算することはできませんが、参考値として多胎率は3.4%となります。今回の調査では新鮮胚移植か、凍結融解胚移植かの別はありませんが、2015年発表の日本産科婦人科学会のARTデータによると凍結融解胚移植での単一胚での移植率は81.83%。妊娠数は56,355件、多胎妊娠総数は1,770件で多胎率は3.2%でしたから、全国的なデータと同じような結果が出ています。

9-2 一般不妊治療との実施比較にみる診療状況

● 一般不妊治療との治療比較

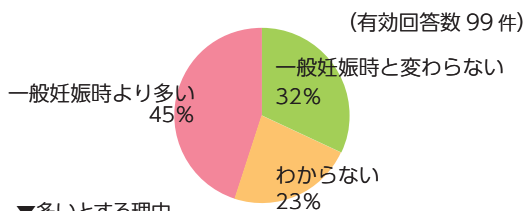


● 一般不妊治療の割合別の患者の割合と妊娠の割合



9-3 体外受精における状況

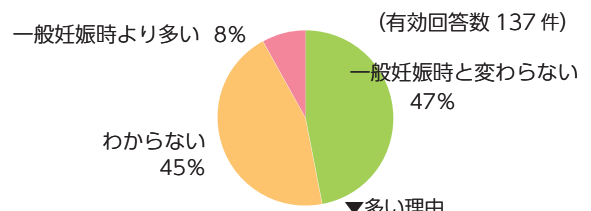
● 体外受精における妊娠時の流産は



▼多いとする理由

治療年齢が高いため 受精卵の染色体異常 生化学的妊娠を一般妊娠では見過ごしている事がある 妊娠週数が早い時期に妊娠判定を行うため 黄体補充をしっかりとっているから

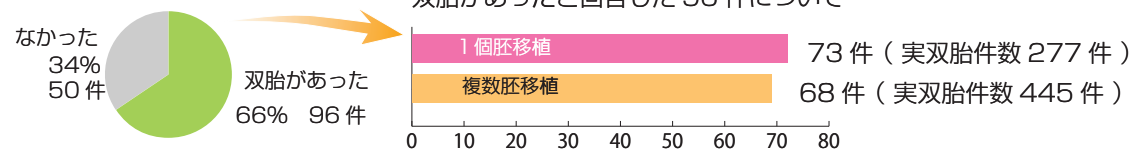
● 体外受精における妊娠時の早産は



▼多い理由

高齢のため 子宮筋腫などによる合併症

● 双胎は何件ありましたか



● 3 胎以上の妊娠は何件ありましたか

